

## 学生たちの観た日本

大学名：清華大学

氏名：邵瑞超

### テーマ：4. 日中間の交流

今回の8日間にわたる日本訪問期間中、私たちは多くの日本企業、大学及びホームステイ先などを訪れ、沢山の方々と交流や討論をしたが、こうしたプロセスにおいて私は中国と日本の二国間交流の重要性及び目下直面している課題などについて自覚することができた。

まず嬉しかったのは、日本の友人らの多くが中国に強い興味を持っていることであった。ホームステイ先のホストマザーは中国での勤務経験があり、現在も中国語を学んでいた。彼女曰く、毎日中国のテレビドラマを観て中国語を学んでいるとのことで、私は彼女のそうした情熱に強く心を打たれた。住友商事では夜の懇親会において上海での勤務経験がある方と楽しく交流することができた。彼は中国の多くの都市を訪れたことがある他、中国の美食がとても好きで、将来また中国を訪れたいとのことであった。また京都大学と一橋大学では多くの同年代の学生と知り合ったが、彼らは皆様々な理由から中国との関係が生まれ、中国に対し好感を持っていた。こうした実際の例から私は、中国と日本人の間には幅広い交流における基礎があり、互いの交流においては良好な関係を築けることが多いことを強く感じた。またこの点は中日関係の基礎は民間にあるとの道理を改めて裏付けていた。

しかしそれと同時に、現在中日両国間の交流は多くの課題と困難に直面していることも知ることができた。3年間のコロナ禍により両国間の人々の往来は大幅に減少したが、それ以上に際立った問題として、両国間の人々の往来には深刻な一方向性が生まれており、中国の人々が日本へ向かう割合が80%を占め、日本人が中国へ向かう場合はそのほとんどがビジネス目的となっている。こうした現象は現在の日中交流における深刻な問題を反映している。日本は多くの中国人観光客にとって最も人気のある海外旅行先であるが、対して中国に観光に訪れる日本人は少ない。様々な理由で中国と関わってから中国を好きになる、そして日本から中国への観光客数の低迷、この2点の間に存在する巨大な現実的障壁については今後の中日交流事業において対応すべき点だと思う。今回私たちの訪日前に中国は日本へのビザ免除政策を再開したが、これをきっかけとして、日本人が中国を訪れ、中国を深く体験し、中国を知りそして好きになってもらうために、私たちにはどのような取り組みが必要なのかを考える必要があると思う。

私は常々、両国間の交流が最も重要であり、双方がお互いに交流してこそ相手を知り、誤解をなくし、共通の利益を見つけ、友好的な協力を実現すると共に、将来的なリスクや課題に対し手を携えて立ち向かうことができると思っている。そして私たちの今回の日本訪問は私たちが日本を知るプロセスであると同時に、多くの日本人が中国を知りそして理解するきっかけだと思っている。近い将来、より多くの中国の若者が日本を訪れ日本を感じると共に、より多くの日本の若者に中国を訪れ中国を知ってほしい。こうした双方向の交流と理解が両国の人々をより親しくし、中日関係のさらなる発展に尽きることのない原動力をもたらすことを願っている。

大学名：清華大学

氏名：王婉琳

### テーマ：1. 国民性についての理解

#### 2. 集団帰属意識の強さ

### 3. マナーのよさと思いやり

日本訪問において印象深かった点は2つある。

1つは、いずれの企業にも長年受け継いでいるモットーがあったという点である。しかも従業員からの紹介の際に度々引用されたことから、こうしたモットーは決して表向きのものではなく本当の意味で従業員一人ひとりに浸透していて、彼らの業務に徹底されている理念であることが分かった。こうした理念については住友グループのように、その家族における先祖の遺訓を起源としている場合もあり、島津製作所では創業者である島津源蔵氏の「科学技術で社会に貢献する」とのモットーを今日まで継承しており、人材募集の際にはこの企業理念に賛同する人材を受け入れている。よって同社の各製品は社会のニーズを満たし人々の幸福感を高めるものとなり、自然と人気を博し日本でも指折りの企業となっている。企業のモットーは彼らの経営戦略であるのみならず、それ以上に志や理想を同じくする人々が集うシンボルであると感じた。

もう1つは、日本人の国民性である。日本人からは全体的な「民度の高さ」を感じた。きれいな道路やトイレは清掃員の掃除によるものではなく一人ひとりが自主的にそうした環境を維持している。また日本人はマナーもよく、常々「すみません」と口にする他、感謝の際にお辞儀をする、お別れの際に「相手が見えなくなるまで手を振る」、食事の前に「いただきます」と言う、ひいては茶道において茶碗の模様を客人の正面にし、お茶を飲み終える際は音を立てて吸い切りをすることでお茶が美味しかったとの意思表示をするなど、こうしたマナーについては慣れないこともあり、「身に余る」が故の気まずさも感じたが、日本人が示してくれた誠意に私はとても感銘を受けた。

ここで私たち自身を顧みると、中国はここ数十年において経済が大きく発展し、世界的に発展している企業も一部出てきているが、現在の就職における習慣では、そのほとんどにおいて給与待遇のみが重視され、「この企業の発展理念は自身の理想と合っているか」といった問題が提起されることはまずない。そのため私は、企業と個人の価値観の一致を実現できるように有名企業を多数輩出している日本の経験から学ぶことが必要だと思う。それと同時に、経済が発展してきた今、私たちは日本の経験から学び、中国の街、中国の人々の民度が世界から称賛されるよう国民の民度の育成に注力するべき時だと思う。

大学名：清華大学

氏名：熊宝博

テーマ：1. 国民性についての理解

#### 4. 日中間の交流

多彩だった今回の日本訪問の旅において印象深い点は多かったが、スペースの都合によりその中から特に印象深かった2つの点について述べたいと思う。

1つめは私の日本民族に対する見方であり、以前目にした「どちらも漢字を使っているが、日本人の心の中の世界は中国とはきつと異なっている。長い歴史において異なる種族の人々がこの島で交わり、地震や津波に直面した際の無力感と絶望、厭世が遺伝子に刻まれていると同時に、広く果てしない草原がもたらすさすらいや孤高さそして野性、霧雨の江南地方のようなおぼろな物悲しさ、桜のような儂さ、死を全く恐れない態度を併せ持っており、これは対立するが融合も可能な、礼儀正しさと荒々しさ、堅実と自由奔放、情熱と無関心が交わった文化であり、中国のような何代にも渡り受け継がれる、永遠に後世まで伝わる、勇敢に突き進む、決して失敗を認めない、楽観的で運命に身を任せ、寛容でおおらかとの文化とは実際には雲泥の差がある。1つは島のやるせなさであり、もう1つは大陸の積極性と包容力である。本来根を同じくして生まれたにも関わらず、海を隔てたことで、海の向こう側は見知らぬ国になっていた」との言葉そのものであった。そして実際に訪れて感じたのはディテールへのこだわりであり、トイレの人間本位の

設計やティッシュペーパーの利便性の高い設計、また日本人の接客時のマナー等のいずれからもこの民族の細やかさを感じることができた。だがそれと同時に街や電車の中では疲れ切った人を目にし、また学生に訊ねた時にもらった回答では、日本人同士は一見良い付き合いをしているように見えるが、人と人の隔たりや孤独感はとて強く、特に日本人が家庭を持った後は自分の家庭が主となり、自身の父母や同僚等との関わりにおいてさえ心の中をさらけ出すことはないとのことであった。

2 つめは日本の学生と言論の自由について討論したことである。日本の学生からは、中国が言論封鎖をしていることで中国の国民は不自由さを感じるのかとの質問があった。例えば日本の民衆は自由に自分達の政府を批判でき、大学の学生や教員さえも自由にデモをしたり横断幕を掲げたりすることで自身の校長を批判するといったことができる。この質問に対し私は、よりハイレベルな自由は一定の境界において実現できる。中国が高等教育を実施して以降、国民の素養は大幅に高まったが、教育の普及はさほど進んでいない。そのため綿密な論理的思考能力や十分な知識レベルを持つ大衆が未だ少なく、企みをもった言論による扇動に乗りやすく、特に人口が膨大な中国独自の国情においては、ひとたびこうした人々が企みをもった扇動に乗った場合、非常に恐ろしい社会的影響をもたらす。また現在、人々は様々な主義について知ってはいるが往々にして生半可な知識であり、例えば先頃ネット上で話題となった中等専門学校の女生徒が数学コンテストで受賞した出来事に関しては、他人の不幸を利用し利益を得ようとするメディアやインフルエンサーのプロガーの他、フェミニズムを煽る個人メディアが現れ、一般の民衆はそうした言論の影響を受けやすいことから、中国においては一部の言論を封じ込める必要があるが、これは人々が不自由であることを意味するものではないと答えた。自国の社会現象に対しては、交流を通じてこそ異なる国の人々がはっきりとした知見を得ることができることをこの点はより物語っていた。

**大学名：清華大学**

**氏名：袁嘉惠**

#### **テーマ：4. 日中間の交流**

今回の日本訪問の旅を一言で言い表すならば、それは幻想的というものであった。

今回私は多くを目にし、そして学んだ。旅においてこうした収穫には、辛く、細々とした、煩わしい事前準備や様々な予想外の出来事への対応が一般的に付きものだが、引率の先生方、見学先の各企業や学校そしてホストファミリーの細やかで完璧な段取りにより私たちのそうした不快に感じる要素はすべて取り払われ、旅や学習における興奮、驚きそして楽しさだけを感じることができた。この1週間余りの旅を振り返ると、私の衣食住と移動はこれ以上ないほど充実した素晴らしいものとなっていて、私はただ他人の労働を享受し、体験と学習に力を尽くすだけであった。

全体的な印象としては、中国には日本と未だ大きな差がある部分が多いと感じた。子どもの教育について言えば、ホストファミリーの2人の子ども、そして交流した2つの大学の学生にはいずれも自由で自信に満ちた「自立的」との共通点があり、さらにスポーツの趣味があった。ホストファザーは疲れを知らないかのように子ども達と一緒に野球、サッカー、バドミントンをし、スポーツ観戦そしてレゴブロックで遊ぶなどしていたが、中国ではここまでできる父親はおそらく多くはないと思う。中国の保護者は心配性で特に子どもの学習成績への管理欲は一般的により強く、自発的に任せることはしない。それによる結果は、中国の大学生は身体能力が良くなく、生活や将来に対し情熱がなく、自分の将来を選択したり設計したりする決断力を失いがちになるということである。同じ東アジア国家として私たちは文化的には日本と近いが、こうした違いが生まれる原因としては、中国における発展度合が未だ不十分、リソースが不均衡、国民の民度が全体的に低いといった点と関係があるのだと思う。

もう1つ印象深かったのは、日本はとてディテールを重視している国であったということである。この点については日常の付き合いにおける礼儀や食事の盛り付けから推して知ることができた。文房具等の日用品においては日本の

ブランドは中国でとても人気だが、その理由は日本の製品の機能は様々なニーズを満たすことができ、あらゆる点に配慮されているからだと思う。島津製作所、ソニー、ホテルニューオータニ等の企業では日本人の製造業に対する根気とひたむきさを体験したが、そうして生み出された製品は様々な試練に耐えることができるものであった。私が日記で述べたように、中国は追いつくのが容易な、成果が早く現れる分野ではすでに多くの先進国に匹敵している、ひいてはそれらの国を追い抜いているが、現在最も欠けているのは「手間をかけただけ出来栄が良くなる」分野である。これについては根気と自己制御能力を備え、謙虚に学び、進歩を続ける必要がある。

今回の旅の記憶は一生忘れないものになると思う。その理由は前述の要因以外にも、良い仲間たちと同行できたからである。彼らと共にこうした旅に参加できたことはなんと貴重な経験であったことか。優秀な人が集まったことで今回独特な交流をすることができた。

お別れの際はとても悲しかった。その理由は自分にとって居心地の良い国を離れたからで、将来またいつ彼らと再会できるか分からず、学校に戻ればまた山のようなカリキュラム、宿題、展示、試験と向き合い、この先の人生においてもこうした非の打ちどころのない体験をする機会があるか分からないからであった。1週間という時間はなんと長いことか、私たちはこれほど多くの事柄について見て、話して、学ぶことができた。1週間という時間はなんと短いことか、初日に大阪で食べたすき焼きの甘じょっぱい味わいが今でも舌先に残っているように感じられた。そして、この1週間で自分が何をしたのか上手く言い出せない気がすると同時に、この1週間で自分が何をしたのかをすぐにでもしゃべり続けられる気がした。これこそが夢の感覚なのだろう。飛行機が間もなく着陸し夢も覚めようとしている。この夢をしっかりと楽しみ記憶しようと思う。

**大学名：清華大学**

**氏名：張恒睿**

### **テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

日本人がマナーや秩序をととても重んじるという点については日本に来る前から知っていたが、日本を訪れた後においても改めて驚かされた。

日本人の言葉遣いを基に言えば、日本人の言葉遣いはとても礼儀を重視している。私自身は日本語が話せないが、日本語学科の学生の話では、日本語における多くの言葉遣いはとても礼儀や場面を重視していて、わずかな違いの言葉がそれぞれ異なる場面で使われているとのことであった。それ以外にも、私自身は日本語をほとんど聞き取ることができないが、日本の人々が「すみません」、「ありがとうございます」等の丁寧な言葉を口にしてのしをしばしば耳にした。

さらに日常生活における例を挙げる。バスの乗り降りや人を待つ或いは道を歩く際、他の人が通れるように道を空け、他の人の邪魔にならない場所で待つか或いは横並びで歩かないよう日本の先生方からしばしば注意喚起があった。私は当初、これは日本における1つのマナーだと思っていたが、その後、一部の日本人は私たちに道を塞がれた後も強引に通ろうとせず、また「道を譲ってください」と言うわけでもなく、私たちの後をゆっくりと歩いていたとの場面に遭遇した。またさらに自転車に乗っていた若い男性は、私たちに道を塞がれた後に自転車を降り手押しで歩いていた。エスカレーターではどれだけ人が混み合っても皆がきれいに左側に立ち、道を急ぐ人用に右側を空けていた。京都に向かう途中で渋滞に遭遇した際、高速道路を降りるランプには長蛇の列ができていたが、もしこれが中国であれば出口付近まで進みランプで割り込みをする車が出てくるが、ここでは割り込みをする車は1台もなく、すべての車がきれいに列を作っていた。このことから、日本人が他人を非常に思いやり、マナーを重視し、他人に迷惑をかけるのを嫌がるとの点が改めて分かった。

もう1つ印象深かったのは、私たちが訪問先の方々とお別れをする際、彼らは私たちのバスの傍まで見送りをし、

姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれて、その際私たちも彼らに手を振ってお別れをするようガイドさんから指示があったことである。これはマナーであるのみならず、日本人のおもてなしや物事への情熱を表していて、私たちはとても心が温かくなるのを感じた。

それ以外にも、日本には非常に多くの素晴らしいユニークな設計が存在することに私は気が付いた。日本の地下鉄では朝晩のラッシュ時に女性用の車両を用意するなど、女性にとっても配慮されていた。またホストファミリーとスーパーに行った際、小さな子どもが子ども専用のカートを押しているのを見かけた。そのカート自体は小さかったが、高い旗が付いており子どもがその場にいることが一目で分かるようになっていて、気付かずに子どもに危害が及ぶとの事態が起こらないようにしていた。こうした設計はとても親切だと思った。スーパーのセルフレジにはビニール袋を広げるためのスタンドがあり、買った物が入れ易くなっていた。ホストファミリーとボウリングに行った際、長かった爪が割れてしまったが、ボウリング場では利用者用に爪切りが使えるようになっていた。日常生活における日本人の他人のニーズに対する細やかな観察と配慮については推して知ることができる。

大学名：北京師範大学

氏名：劉夢楠

テーマ：1. 国民性についての理解

2. 集団帰属意識の強さ

4. 日中間の交流

1. 日本人の国民性に関しては、ディテールや秩序を重視していて、集団意識が高いと思う。私が見学した企業などからは日本の人々の仕事に対する極めて高い責任感とサービス意識が感じられた。島津製作所の見学では、品質管理や絶えず進歩を求める企業の姿勢が印象的だった。その他、家屋内の物品の配置に関しては、大きなものでは部屋の区分から小さなものでは子どものおもちゃの配置ひいては台所用品の収納まで、それらいずれもが整然と秩序だっていた。日本企業の集団意識は非常に強く、これは企業の成功の要因の1つだと言える。住友商事を例にすると、日本の大型グローバル企業である同社の事業範囲は多岐にわたり、グループ内の他の企業や部署との協力も非常に重要になっている。こうしたグループ内での協力の精神は、住友グループが複雑な市場環境に直面した際にリソースの柔軟な制御と分配を実現することで、企業の発展における新たな変化と機会に適応することを可能にする。住友商事が採用している管理モデルには柔軟な調整の余地が多く存在しており、これは従業員個人のキャリアアップに幅広い可能性をもたらしている。住友商事ではさらにゲームエリア、カクテルパーティー、チームビルディング等の活動の場を設けており、上層部と従業員の関係における潤滑剤となるなど、住友商事内部の職場環境を決定づけている。もちろん日本企業内ではチームワークが一般的にとっても重視されている。ソニーや住友商事といった異なる企業においてもチームワークと企業文化の緊密な関係性がいずれも感じられた。同じチーム内の従業員らが皆共通の目標のために奮闘しており、1つの製品がお目見えするその背後にはチームメンバーらの心を1つにした努力があった。その他、ホテルニューオータニでは日本のサービス業の高度な専門化と礼節やおもてなしの精神を感じ、細やかなサービスからスタッフの態度まで、それらいずれもが日本民族の高い文化的素養を示していた。

2. 中日交流。日本企業の見学を通じて、私は中日両国のビジネス文化における共通点と相違点を強く感じた。中日両国には歴史、言語、社会慣習において大きな違いが存在するが、企業管理や協力の面では両国共に質、チームワークそして長期的戦略プランを重視している。今回見学した企業のいずれにも中国での勤務経験のある日本人が多数在籍していて、彼らとの交流を通じて私は、中日交流のプロセスには文化の違いにより誤解が生まれる状況が時折発生するが、こうした事態は逆に両国の企業の世界市場における協力を一定の度合で促進していると言える。例えば、現在ソニーと中国の協力は製品の販売のみならず、技術、イノベーションそして文化交流においてもより緊密

になっている。日本企業の細やかな管理と中国企業の柔軟性が融合することで、グローバル競争においても強い優位性を形成することが可能となる。また、近年の中国市場の急速な発展に伴い、多くの日本企業が中国との協力をより重視しており、相互の訪問や学習、中国支部の開設、中国事業担当部署の設立等を通じて、中国市場のニーズや消費者の変化について次第に理解を深めている。こうした交流は両国の経済発展を後押しするのみならず、両国の人々の文化的また社会的側面での相互理解も深めている。

大学名：北京師範大学

氏名：杜佩桐

## テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

日本人の集団帰属意識の強さ：伝統と現代における変化

日本社会は長きにわたってその強い集団意識と集団主義文化を特徴としており、こうした文化は家庭や学校そして企業等の社会における様々な面に浸透している。伝統的な大家族であれ大企業の職場環境であれ、一般的に個人は自身のアイデンティティと行為を集団の目標や命運と結びつける。しかしながら、社会の現代化やグローバル化の進展及び若者世代の職業における自由や差別化といった追求に伴い、従来の集団意識が依然確固たるものとして存在しているか、又は集団主義が新たな時代背景においてどのように転換するのかについては研究に値する問題となっている。

日本の集団意識にはしっかりとした文化的基盤があり、その起源については封建社会の時代まで遡ることができる。家庭であれ職場であれ、集団主義文化は常に主導的地位を占めており、個人の行為と決定は常々集団の利益と目標の制約を受け、集団の共通認識や帰属意識は個人の生活において必要不可欠なものとなっている。日本では、家庭そのものが小さな「集団」であり、その中の各メンバーには明確な役割と責任がある。日本の教育システムでは幼い頃から「集団主義」が強調され、子ども達は学校において仲間と協力する、グループのルールを守る、個人を優先するのではなく集団の利益を重視するといった指導を受ける。教師や親もこうした集団文化の教育を通じて子ども達の社会的責任感や集団意識を育む。日本の企業文化においては集団意識が特に明確になっている。従来の「終身雇用」制度と「年功序列」制度は従業員と会社間の「家庭的」関係を推し進め、企業において従業員らのアイデンティティと帰属意識はとて強くなっている。日本の大企業は一般的にチームワーク及び会社と共に発展するとの理念を重視し、個人は往々にして自身の事業と会社の成功を切り離せないものとしている。こうした文化により企業は仕事をする場所であるのみならず、従業員の生活における中核部分となっている。

しかしながら、グローバル化、技術の進歩及び情報化が進むに伴い、従来の集団意識に対する若者世代の共通認識に変化が生まれている。特にインターネット業界、クリエイティブ産業等の分野では多くの若者がより差別化した自由なキャリアを追求し始め、従来の終身雇用制度や長期間の企業への忠誠というものは彼らが最優先するものではなくなくなっている。こうした変化は日本社会における集団意識に対する試練となっており、また集団意識の現代化や多様化を推し進めている。近年、若者は親の世代のように自身の生涯を1つの会社に捧げることがなくなるなど、職業における流動性が大きく高まっている。日本の調査データによると、より良い待遇や職場環境又は自身の興味に合う雇用機会を求めるために転職をする若者がますます増えている。とは言え、これは若者が集団意識を完全に放棄したことを意味するものではなく、新たな職場環境において彼らは依然としてチームと協力関係を構築することを望んでおり、ただこうした関係が単なる企業への忠誠ではなく柔軟性及び共同の価値観への賛同をより重視するものであるにすぎない。現代の若者はベンチャー分野において帰属意識を求める傾向がますます高まっている。従来の大企業と比べ、ベンチャー企業や小・中規模の企業は往々にしてより柔軟で、従業員が仕事においてより多くの個人的価値を示し、さらにチームと共により有意義な成果を創り出すことが可能である。こうした環境における集団意識は集団の

目標の実現と個人の発展の融合をより強調するものであり、従業員はより多くの自由度を享受すると同時に、チームへの強い帰属意識を感じるができる。

現代社会における変化は集団意識の従来の形式に変換をもたらしているが、それらは完全に消失したわけではない。反対に、集団意識は現代社会のニーズに適応するプロセスにおいて、個人と集団の目標とのバランスと相互作用を強調するといった新たな様相を呈している。新たな企業文化の出現に伴い、多くの企業が社会的責任及び集団的価値観を重視し始め、特にテクノロジー、環境保全、ソーシャルイノベーション等の業界では大量の若者を呼び込んでいる。これらの若者は集団主義を完全に拒絶したわけではなく、集団意識を社会的責任感やイノベーション精神等の要素と結びつけ、新たな集団における共通認識を形成していると言える。こうした企業において従業員は企業の目標に賛同するのみならず、企業が担う社会的責任をより重視しているため、彼らの集団意識は多元的意義を有している。従来の企業文化とは違い、現代の企業は従業員の自主性と創造性を重視しており、特にハイテク、クリエイティブ及びサービス業界において従業員個人の発展とチームワークは企業が成功する上での鍵となる。たとえ企業が個人の創造力と柔軟性を強調しても、従業員らは依然としてこうしたチームの中で帰属意識を見つけるのである。なぜなら協力と共同での取り組みがあつてこそ、より大きな目標の実現が可能になることを彼らは十分承知しているからである。

確固とした文化そして伝統である日本の集団意識は現代社会において顕著な変革を遂げている。若者世代の個人主義の観念と職業における自由への追求により、集団意識は従来の忠誠と犠牲からより柔軟で多様化した形式に転換している。とは言え、集団意識は消失したわけではなく、現代社会のニーズに適応するプロセスにおいて、段階的に変化すると共に新たな活力を生み出している。将来的に、従来の集団的精神を守ると同時に個人の自由と多様化した発展をいかに促進するのが、日本社会及び企業文化の発展における重要な方向性になると思われる。集団意識の現代化は日本の社会や文化の発展における縮図であるのみならず、集団主義と個人主義の間の動的バランスをも示している。新たな時代背景の下、集団帰属意識は依然として日本の社会そして職場において軽視できない力であり、こうした力は今まさにたゆまぬ適応と変革を通じて、より柔軟で寛容な文化形態を形成している。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：安懿**

**テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

私は日本語を学ぶ過程において初めて日本人がマナーを非常に重視していることを知った。日本語における複雑な敬語体系は対象や場面の違いにより柔軟に変化するが、こうした特性は外国人学習者が特に難しく感じる点であり、たとえ日本人であっても常に気を付ける必要がある。今回実際に日本を訪れ大阪や京都そして東京等の地を巡り、企業や大学また文化施設について知見を深め、各界の、また年代の異なる人々と交流したことで、私は日本のマナーについて全面的且つ深い理解をすることができた。

日本の企業では上層部の人そして現場の従業員のいずれも非常に高いプロとしての素養や親近感を見せていた。彼らは私たちのことを社会に出たばかりで経験や知識の乏しい若者と見なすことはなく、終始真剣に、そして誠実な姿勢で私たちからの質問に丁寧に答えてくれた。こうした平等と尊重による交流方式により私は日本人の礼儀正しいスタイルを深く体感すると共に、私自身も同様の姿勢で他人と接したいと思うようになった。特筆すべきは、たとえ役職の高い従業員であってもエレベーターに乗る際は私たちが入りやすいように進んでドアを押さえてくれたことで、こうした細やかな気配りは中国ではあまり見かけないものであった。日本では、彼らは私たちをゲストと見なし非常に高い敬意をもって接してくれた。こうした品性の素晴らしさに私はとても感銘を受けた。

ホームステイでは日本の家庭生活におけるマナーを直に体験することができた。日本人は日頃から家族にも「ありがとう」、「おかげさまで」、「いってらっしゃい」、「いただきます」、「ごちそうさまでした」等の感謝や挨拶を伝える。

これらは一見簡単な言葉だが、彼らの他人への感謝との思考を育んでおり、また彼らを他人の困難に気付きやすくしている。こうした相互理解の精神は社会の安定と調和にとって極めて重要である。

ホテルやレストラン等の公共の場所ではまた頻繁に日本人と遭遇したが、彼らはエレベーターに乗る際は常に「すみません」との言葉を口にし、たとえ他人に迷惑をかけていなくてもその言葉で他人への尊重とお詫びの気持ちを伝えていた。その他、ホテルのスタッフそしてレストランのもてなしのいずれにおいても、彼らは常に心のこもった「こんにちは」との言葉で1人ひとりのゲストを迎え、ゲストが帰る際には「ありがとうございました」との言葉で見送っていた。こうした互いに挨拶をし合うとのマナーは、互いの尊重を表すのみならず、サービス業への差別視を効果的に減らすことにもつながる。また中島先生が以前言っていた「相手が見えなくなるまで手を振る」とのマナーは、それ以上に日本人のマナーへの追求における極みを表している。

当然、マナーを過度に求めた場合はマイナスの影響をもたらすかもしれないが、全体的に言えば、マナーは日本人の全体的な民度を高め、人と人の調和のとれた交流を促進しており、個人や他人ひいては社会全体にポジティブな影響をもたらしている。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：楊宇軒**

## **テーマ：2. 集団帰属意識の強さ**

北京師範大学日本語学科の2年生である私は、今回幸いにも訪日代表団の一員として「走近日企・感受日本」の旅に参加することができた。今回の旅では多くの感想が得られたが、ここでは日本企業における従業員の帰属意識について述べたいと思う。島津製作所、みずほ銀行及び住友商事の見学を通じ私は日本人従業員の集団帰属意識を特に強く感じた。中国企業の従業員と企業が相容れない関係にあるのとは対照的に、日本企業の従業員と企業の絆は清らかな泉のようで、静かに私の心に流れ込み、日本の企業文化に対するまったく新しい認識を与えてくれた。

私たちが訪問した最初の企業は島津製作所で、その名前自体に創意と伝承が秘められた場所であった。島津製作所において私たちはノーベル化学賞受賞者である田中耕一氏の実験室を目にした。科学界におけるきらめく存在である同氏はスポットライトの下で名声を享受するのではなく、昔どおりに島津製作所の実験室での仕事に没頭している。そうした同氏の姿勢からは個人の栄誉を超越した帰属意識を感じた。それは科学研究事業への愛であり、またそれ以上に島津製作所という大きなファミリーへの深い感情である。こうした帰属意識こそが、島津製作所の発展に自身の力を捧げるべく同氏を研究の道において常に前進させていると言える。

住友商事、この聞いただけで無限の可能性が感じられる場所では、従業員1人ひとりが探検家のようで、彼らが住友商事について語る際、その言葉からはこの場所への愛と思いが感じられた。住友商事は才能を発揮する舞台を提供するのみならず、それ以上に夢を現実にする場所であり、住友商事において従業員は興味のある分野を見つけ常に開発そして探求するなど、自身と企業との結びつきと気持ちのつながりを感じることができる。住友商事において従業員は同僚である以上に家族であり、共に住友商事の輝かしい未来を描いている。こうした帰属意識により、彼らは手を携え共に課題に向き合い、より素晴らしい未来を創造している。

その次はみずほ銀行の見学であった。ここで私たちと交流をもった役員の方はすでに金融に携わってから30年以上と時代の証人のようであった。その顔には歳月の跡が残っていたが、瞳の中には仕事への無限の情熱と執着が宿っていた。私たちが彼に「みずほ銀行での長い年月において転職を考えたことがありますか」と訊ねたところ、彼からは「私は中国が好きで、ここでの仕事では中国について知見を深めることができます。今の自分の仕事が好きなので転職をする必要はありません」との回答があった。みずほ銀行の行員らが仕事について語る時に最もよく使っていたのは「面白い」、「楽しい」という言葉であった。この言葉自体は簡単なものだが、その背後には仕事への愛と尊

重及びみずほ銀行という大きなファミリーに対する帰属意識と誇りが秘められている。こうした帰属意識により、彼らは仕事において楽しさを見つけ、絶えず卓越性を追求するなど、みずほ銀行の着実な発展に貢献している。

特に印象に残っているのは、あるみずほ銀行の行員がしみじみと語った「私はここであまりにも多くの善意とサポートを受けたので、日本を離れたい」との言葉で、この短い言葉は無数の日本企業の従業員の心の声を述べているかもしれないと思った。彼らはこの土地に強い思い入れがあるのみならず、それ以上に自分が所属する企業や自身の事業に手放すことのできない感情を持っている。こうした帰属意識により、日本企業で働く1人ひとりがまるで心の拠り所を見つけたかのように、仕事において思い入れや価値を見つけることを可能にしている。

日本訪問を終え帰国した私の心には感慨が溢れている。日本企業の雰囲気の良いは進んだ管理制度や高い業務効率のみならず、骨の髄まで浸透したあの集団帰属意識に示されている。こうした帰属意識により、従業員と企業の間で言葉にできない呼吸の良さや力が形成され、企業の発展を共に後押ししている。またこうした帰属意識は日本の企業文化における要であり、グローバル競争において日本企業を不敗の地に立たせている要因の1つでもある。

私はこれこそが私たちの今回の日本訪問における最大の収穫かもしれないと思っている。将来的に私たちもまた自分らが好きな、愛する職場、そして自分自身の帰属意識が見つかることを願っている。それと同時に、より調和のとれた素晴らしい中国の企業文化構築のために共に努力そして貢献をしていきたいと思っている。

大学名：北京師範大学

氏名：李珂

テーマ：1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

日本の文化は古代中国を起源としているが、遣唐使による交流が終了した後、日本は茶道や仏教宗派、浮世絵等日本としての独自性を持つ文化を次第に形成した。高台寺において座禅や茶道を体験した際に、私は日本人の国民性における「1つの道に精通している」との点をより強く感じた。

人は思考もできれば呼吸もできるため、呼吸に集中することができる。長い時間呼吸に集中することができれば、あらゆる事に集中することが可能になる。座禅が体現するこうした精神は日本の職人氣質の源なのかもしれない。京都の街を歩くと至る所で100年以上の歴史を持つ老舗を目にする。学术界において1つのテーマについて掘り下げて研究する人は、成功するまで何十年も研究を続けることができる。1つの企業が100年間止まることなく時代と足並みを揃え続けることができる。日本は国土が狭く、産物も乏しいことから、彼らはいかなる些細な物事も非常に大切にすると共に、そうした物事を掘り下げて研究する忍耐力を備えている。

正にあらゆる些細な物事について研究することが可能なため、こうした細やかさはまた日本人の人付き合いや物事と接する態度にも表れており、彼らは互いに相手の気持ちの些細な部分にも配慮することができる。たとえ他人の傍を通る時でも邪魔になることを恐れるため会釈をして謝る。電車では他人の休息の妨げにならないよう絶対に電話に出たり大声で話したりしない。それは家族内でも同じで、日本の子どもはとても聞き分けが良かった。そしてホームステイの際には、その理由が父母と子どもの間で平等な付き合い方をしているためであることを知った。子ども達は幼い頃から父母の穏やかな教育の下で生活することで自然と日本社会におけるマナーやルールを学んでいく。日本人は日頃から他人の立場で物事を考え、もし相手が不便さを感じていることを察知した場合はすぐにお詫びをする。「すみません」や「ごめんなさい」はおそらく使用頻度が最も高い言葉かもしれない。

私たちが訪問した5つの企業の社是はいずれも2つの共通性を示していた。1つは優位性維持の方法として人材の発掘を重視していて、もう1つは発展目標が特定の部分に制限されておらず、より幅広く視野を広げており、全人

類そして地球全体の未来を自らの責務としていた。中国と日本は隣国であると同時に世界でも上位 5 つに入る経済体の中の 2 つの主体であり、互いの協力関係は軽視できない。

現在の中日関係はアメリカという覇権主義国家の干渉により見通しが立たない状態になっている。歴史の視点から見ると、中国とアメリカはいずれも日本に対する大きな影響力を持っている。古代日本は中国から文化や政治制度等を学んでおり、それが数百年続く中で中国から伝わった仏教や茶道等の文化が日本人の国民性の中核的要素となった。しかし近代においては、黒船来航に伴い日本は明治維新を始めた他、戦後の日本はアメリカの管轄を受けアメリカ文化の影響の下で現在の流行文化「Cool Japan」を形成しており、日本の現在の漫画や音楽などはいずれもアメリカの影響を強く受けている。またそうした文化やその他様々な影響を受けた日本の若者はよりアメリカを好む傾向にある。

大使館の参事官からの紹介によると、現在中国を訪れる日本人はとても少ない一方で、日本の漫画やアニメ等の文化が中国に伝わっていることで多くの中国人観光客が日本を訪れている。東京の繁華街や渋谷、銀座、秋葉原の街は世界各地の人でごった返しており、その中には中国人も少なからずいた。「原神」といった中国で人気のゲームのポスターが秋葉原の街中に貼られていたが、こうしたゲームもまた日本文化の影響を強く受けており、「中国文化の特徴」を備えた部分が不足している。中国が必要としているのは、より若者を引きつけると同時に中国独自の特徴を持つ文化が日本に伝わることで、より大きなメディアにより私たちに対する日本人の見方を変えることだと思う。

こうした基盤の上で、中日両国の平和的発展にはさらに多くの国民による賛同が必要である。中日両国の間にはどのような過去があろうとも、私たちは将来的な世界の発展の流れを直視しなければならない。中日両国の友好的関係は人類全体そして世界全体に今まで以上に安定した発展をもたらすことができることに、中国そして日本人々が気付くことを願っている。

現在の中国と日本は蜜月期の到来を待っており、中日両国は経済や文化など各方面においてより大規模な協力を必要としている。両国により多くの活力をもたらす契機を、首を長くして待とうと思う。

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏 名： 汪婧儀**

**テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ**

**3. マナーのよさと思いやり**

**6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術**

今回の 8 日間の旅において、私は日本人の集団帰属意識を特に強く感じた。企業訪問では従業員らの発言を通して企業の精神や文化について知見を深めることができ、企業は従業員にとっての大きなファミリーのように感じた。その他、日本の友人らとの交流においても、彼らがスポーツチーム内の一員としてチームへの思い入れが非常に強いことを知り、彼らの「勝ち負け問わず、必ず共に戦う」との精神に私はとても感銘を受けた。こうした点はまた私たちがチームの一員として学ぶべき点である。

私が学校の日本文化関連の授業で学んだ内容や『菊と刀』で読んだ「日本人はルールを非常に良く守る」との点に示されるように、日本人は自律性が極めて高い。地下鉄を利用する際に左側通行のルールを守ることであれ、また日常の通勤において道路を横断する時に信号無視をする人がいないことであれ、それらいずれもがルールを守ることによってシステム全体が正常かつ効率的に動作し他人に迷惑をかけないとの日本人の配慮を表している。日本人はマナーにおいても非常に細やかであり、日常の会釈や挨拶、お辞儀等の 1 つひとつの言動は日本人の心の中に備わったマナーを表している。悠久の歴史を持つ礼儀を重んじる国として私たちは自国の優れたマナーを受け継いでいく必要があると思う。

ホテルニューオータニのエコ施設の見学では、排水の循環利用と生ごみの堆肥処理技術に驚かされた。技術スタッフからも、島国である日本は資源が乏しいことから、人々は「常に災害に備える」との意識を持っており、資源利用や環境保護については特に厳しく行われているとのお話があった。現在急速に発展している中国が「カーボンピークアウト」や「カーボンニュートラル」といった目標を完全に実現する上で、こうした資源の循環や廃棄物の処理による利用技術は今後ますますニーズが高まる技術になるかもしれない。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：肖瑩盈

テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

近年、日本のアニメは世界における影響力が日増しに高まるなど日本文化におけるソフトパワーの重要な担い手となっている。日本のアニメは独創的なストーリーを備えており、豊かな想像力の他、ストーリー展開に紆余曲折があり人を夢中にさせる。『ドラゴンボール』から『ナルト』さらには『進撃の巨人』まで、これらの作品はいずれもその独特なストーリーの魅力で無数のファンを惹きつけている。

また、日本のアニメはキャラクターが非常に個性的で一目見たら忘れられない存在であり、『ワンピース』のルフィや『スラムダンク』の桜木花道等のキャラクターは多くの人々の心の中で模範となっている。

さらに、日本のアニメは素晴らしい制作技術を備えており、画面や音響効果また特殊効果等の面でいずれも高いレベルに達するなど、視聴者に最高の視聴体験をもたらしている。『千と千尋の神隠し』や『君の名は。』等の作品の画面の美しさは人をうっとりさせるほどである。

そして最後に、日本のアニメは人々の心に広く受け入れられる価値観を備えており、こうした点も若者の支持を得ている重要な理由の1つとなっている。

日本のアニメ産業はすでに日本経済における重要な柱となっており、巨大な経済効果をもたらしている。またグッズやテーマパーク等のアニメ関連商品の開発はその経済効果をさらに高めている。日本のアニメはその独特な魅力で世界中のファンを惹きつけており、多くの国や地域においてアニメはすでに日本の代名詞となるなど、日本のナショナルイメージの向上に一役買っている。日本のアニメ作品には忍者、武士道、茶道等日本の伝統文化の要素が多く含まれており、アニメという担い手を通じて日本文化は世界中に広まっている。それと同時に、文化や言葉の垣根を越える交流方式であるアニメは、様々な国や地域との距離を縮めており、多くの国や地域の人々は日本のアニメの視聴を通じて日本に強い興味を持つ他、さらには国際交流の促進にもつながっている。

以上から、中国が文化におけるソフトパワーを高めるために必要な点については以下のものが挙げられる。1つめは自国の文化的リソースの開拓で、中国には5000年の歴史による豊かな文化的根底があり、私たちはそうした自国の文化的リソースをしっかりと開拓する必要がある。2つめはテクノロジーレベルの向上で、アニメを例にすると、アニメの制作過程において私たちは技術革新による作品の質の向上を重視する必要がある。3つめは市場の開拓と国際提携、4つめは知的財産権保護の強化、5つめは社会的便益と文化の宣伝の重視である。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：馬莉姬

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

今回の日本訪問では日本人従業員との交流や彼らに対する観察を通じて、日本企業には中国企業と異なる部分が多く、私たちが学ぶべき優れた点が非常に多いと感じた。

日本企業の従業員は企業に対する共感や帰属意識がとて強く、従業員による企業紹介の際、彼らの語気からはいずれも誇りと幸福感が感じられた。中国には優れた人材が多いが、極度な内向き競争の環境そして企業の不合理な給与制度により、多くの人が中国を離れざるを得ない若しくは企業や仕事に大きな不満を持つとの状況につながっている。また中国企業における随時の解雇との問題は、従業員が帰属意識を持つことを困難にしている。

目下、中国における大企業の多くはインターネット企業だが、対して日本の大企業は製造業やサービス業等様々な分野にわたっている。こうした多様化した発展モデルは日本企業が市場の変化に直面した際のより柔軟な対応を可能にする。中国には日本の商社のようなタイプの企業は存在しない。中国経済は持続的に成長してはいるものの、多くの企業は世界市場の開拓に努めるなど国際化戦略を強化し、海外市場を開拓することで持続可能な発展を実現していく必要がある。日本に来る前に、日本の本土には日本があり、海外にも日本があるとの言葉を耳にしたことがある。これは、日本の海外におけるビジネスネットワークが非常に発達しているという意味である。中国の企業もまた互惠との原則を守りながら海外市場を積極的に開拓するなど、真に世界に進出することが求められる。

その他、日本企業は従業員の育成と成長を非常に重視している。日本企業は従業員の技能や素養を高め続けることでのみ企業としての競争力が維持できると確信しているため、従業員に対し様々な研修や講座及び機会を定期的に提供するなど従業員のたゆまぬ学習と成長を後押ししている。一方、中国企業はこうした面で未だ大きな改善の余地を残している。

また、日本企業は管理においても独自の特徴を持っている。日本企業はチームワークと意思疎通を重視しており、従業員同士のサポートや協力を奨励している。それと同時に、細部や品質管理も重視するなど完璧な勤務態度を追求している。こうした管理の理念や方法はいずれも中国企業が参考にすると共に学ぶべきものである。

ホテルニューオータニの見学では、日本企業の社会的責任感の高さを感じることができた。特に驚いたのは、日本企業の環境保護における基準が、国が企業に対し示している基準よりも厳しいことであった。中国が質の高い発展に向けた転換をしている現在、中国企業としてもこうした社会的責任の意識を確立し、あらゆる面で絶えず進歩を求める必要がある。

いずれにしても、今回の日本訪問では日本企業の従業員の共感、多様化した発展、育成や成長及び管理理念等の面での優位性を強く感じることができた。もし中国企業がこうした優れた点を参考にさらに改善し、自社の発展に応用できれば、きっと今まで以上に優れた成果を収めることができると確信している。

**大学名： 対外経済貿易大学**

**氏 名： 江嘉鏗**

**テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ**

**3. マナーのよさと思いやり**

悠久の歴史と独自の文化を持つ国である日本の社会構造と人間関係は「集団意識」（集団帰属意識）やマナーの中に根付いている。今回の日本訪問以前に私は学校での授業において日本のマナー文化について一定の知識を得ていたが、「本の知識だけでは足りない部分があり、真に理解するには自ら実践する必要がある」との言葉通り、今回の日本訪問の旅を通して私は教科書には存在しない多くの知識を確かに学ぶことができた。集団と調和を非常に重視する日本の社会において、個人の行為や態度は往々にして全体的な環境の影響を受ける。そして全体はまた個人により構成される。そのため個人の視点から見て、日本人の集団帰属意識と他人へのマナーは私が日本の人文社会を研究する上で最もベースとなる、また最も重要な部分となっている。

日本において、集団意識は一種の強い集団帰属意識であり、それは日本社会の様々な面に浸透している。そして個人と集団の緊密な関係を強調するこうした集団意識により、人々は個人の利益と集団の利益を一体のものに見なしている。こうした集団意識は家庭や学校、企業等様々な分野に表れており、例えば私たちが初日に訪れた島津製作所では、従業員が自己紹介をする際に自分の名前の前に必ず「島津製作所〇〇部署の」とのフレーズを入れていた。また京都大学や一橋大学で交流した学生らも、まず初めに大学名、次いで学部名、最後に自分の名前の順で自己紹介していた。こうした習慣は日本人の集団帰属意識の表れであり、日本人は日頃から自分を集団の一部と見なし、個人の利益よりも集団の利益を重視する行動を心掛けている。ホストファミリーとおしゃべりした時にも、こうした集団意識の形成については日本の歴史や文化と密接な関係があることを知った。日本の伝統文化は調和と共存を強調している。日本の学校では子どもらに対し儒教における大同思想に似た教育をしており、学生らは幼い頃からクラスメイトと協力し、他人を尊重し、チームワークを育むとの教育を受けている。そのため、集団意識は社会の要求であるのみならず、日本人の個人の成長プロセスにおける重要な構成要素でもある。

日本では、マナーは人と人のコミュニケーションにおける懸け橋と見なされており、他人への尊重や配慮を表している。公式の場や日常生活を問わず、日本人は皆マナーにとっても気を遣っている。例えば人と会った際のお辞儀は一般的な挨拶の方法であり、お辞儀の角度や時間は相手側の地位や関係性によって決まる。こうした細やかなマナーは日本人の社会的地位や人間関係に対する高い感度を表している。その他、食卓でのマナーも同じく非常に重要で、食事の前に皆は両手を合わせて「いただきます」と言い、食事を終えた後は「ごちそうさまでした」と言う。これは食物への感謝であるのみならず、食事の準備をしてくれたことへの感謝でもある。また食事中に料理を分け合う、お互いにお酌をする等は一般的なマナーである。こうした行為は形式上のマナーである以上に他人への配慮であり、日本社会におけるマナー文化への重視度合を示している。今回の8日間の日本訪問では、バスの運転手やコンビニの店員また偶々遭遇した人などを問わず、日本の人々は皆、先にすみませんと言ってから丁寧な口調で私と意思疎通をしていて、私もそれに対し敬語で返答していた。日本のマナー文化は今回の旅においてとても印象的であり、私にとってはこのマナーの授業は必ず将来にも活かすことができるものであった。

日本社会における集団意識、マナーや他人への思いやりについての観察を通して、こうした要素は日本人の日常生活を構築していると共に彼らの人付き合いや社会活動にも影響を及ぼしていると感じた。グローバル化している今日、文化的差異は依然として存在しているが、日本人によるマナーや思いやりへの重視は私に多くの大変貴重な参考となる経験をもたらしてくれた。個人の成長を追求すると同時に、いかにより良く集団に溶け込み、他人を尊重し、調和を守るか、これらは将来的に私が中国社会において学びそして経験を積み、自身を向上させる上で絶えず考え実践すべき課題である。

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏名： 喬彬**

**テーマ： 5. アニメなどのソフトパワー**

#### 1. アニメ文化の幅広い浸透：秋葉原での見聞

秋葉原を散策する中で私は初めて二次元文化の魅力をはっきりと感ずることができた。この街はアニメ関連のポスター、ガレージキットそして様々な店で埋め尽くされ、多くの観光客で賑わい、活力に満ちていた。アニメは一種の娯楽であるのみならず、それ以上に日本という国の文化における独自のシンボルとなっている。『ドラえもん』における友情というテーマであれ、また『君の名は。』における感情の機微であれ、これらの作品は独自のストーリー展開と美しい画面で世界中の視聴者の心を虜にしている。秋葉原で私は、これらのアニメ作品がどのようにして多様で包括的なコミュニティを形成し、世界中から人々を引き寄せ、日本文化への愛を共有するのかを目の当たりにした。

アニメは「観る」という側面に留まらず、それ以上にその双方向性と没入感で人々の生活に影響を及ぼしている。二次元をテーマとしたゲームショップや喫茶店では、アニメと日常生活の融合を体験した。そのストーリーから関連グッズ、さらにはそこから派生する没入型体験まで、アニメ文化は完全な1つの連鎖を形成しており、日本の文化産業における創造力と経済的価値を示していた。

## 2. アニメ文化の背後にある精神力：企業の革新と努力

ソニー本社の見学において私はアニメ文化の背後にある精神力について知見を深めることができた。イノベーションで名を馳せる企業であるソニーは長年、アニメやゲームそして映画産業への技術支援を行っており、代表的な『ファイナルファンタジー』から『鬼滅の刃』といった映像制作まで、ソニーはこれらの作品に対し技術的な後押しをしている。

ソニーの従業員は若さや活力そして情熱を原動力としており、彼らの仕事への情熱に私はアニメ作者のモノづくり精神を連想した。無数の優れたアニメ作品の背後には作者のディテールへの追求や品質へのこだわりがある。この点から見た場合、アニメは一種の娯楽であるのみならず、それ以上に情熱と専門性が完全に融合した文化の表れであると言える。ソニーの従業員の仕事への姿勢からは、日本のアニメ文化の成功は、こうした創意や品質への強い尊重に起因することを知った。

今回の旅において私は、ソフトパワーの意義は単なる発信という部分ではなく、一種の対話の可能性を構築するという部分にあることが分かった。新時代の青年である私たちは、どのように「ストーリー」を述べるのかを日本のアニメから学ぶ必要があるだけでなく、それ以上に自身の文化的分野において同様に生命力や発信力を持つ作品をどのように生み出していくのかを模索していく必要がある。

**大学名：中国石油大学**

**氏名：賀雨欣**

## テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

集団意識（又は集団帰属意識）は個人が集団において共感し溶け込みさらに集団との関わりを維持するとの一種の心理状態である。今回の日本訪問では異なる文化的背景や環境における集団意識の形成方法及び集団意識の個人や集団に対する意義について知見を深めることができた。

### 日本社会における集団帰属意識の体験

島津製作所や住友商事への訪問を通じて、私は日本企業の強い集団意識を感じる事ができた。島津製作所のKYOLABSでは意見交換により製品開発を後押ししている他、住友商事では包容力のある企業文化により様々な思考を取り入れることで、従業員が会社の発展の方向性と合った興味を見つける手助けをしているなど、彼らは従業員同士の意見交換を重視しているのみならず、分野の垣根を越えた協力も奨励していた。こうした従業員の「個性及び思考の統一」を重視するモデルは集団帰属意識の育成における日本企業の深い意図を非常に良く表している。

その他、日本における就職状況もまた印象的であった。学歴や専攻を問わず、企業は従業員が企業の価値観に賛同するかどうか、連携して助け合うことができるかどうかをより重視している。こうした個別化や帰属意識への重視は、従業員と企業の共生関係を促進するのみならず、集団意識をもより一層強化している。

### 集団における個人の帰属意識と役割

今回の訪日団の活動では、個人としての帰属意識もまた知らないうちに形成されていた。例えば、京都大学の学生との交流そして一橋大学での討論では、互いに相手方の文化や理念を学んだ他、チームワークにおける信頼と開放

の重要性を自覚することができた。Moriiさんと親交を深める中では、共通の目標（文化交流）を通じて形成される帰属意識は個人の文化的差異を遥かに上回ることを感じた。こうした目標によりもたらされる共通認識は集団における私自身の役割意識を強化した他、私自身としてもより積極的に集団に溶け込み責任を負うようになった。

#### 文化や環境の集団意識に対する影響

新幹線の精確な運行や高台寺の静まり返った環境の下での茶道体験からは、日本社会における秩序と文化的ディテールの集団意識に対する感化との影響を感じた。こうした環境において人は社会との関係がより密接になり、集団に対する個人としての賛同もより構築しやすくなる。例えば座禅や写経の際の様々なマナーの体験からは、日本人の秩序や儀式的な緊張感により集団における共通認識を形成する方法について知り、またこうした共通認識は同様に企業文化にも表れていた。

#### 国際交流における集団意識の重要性

日本人家庭との交流を通じ、私は文化交流の集団意識に対する促進作用についてより一層自覚することができた。東京のホストファミリーと一緒に金魚すくいをしたり、たこ焼きを作ったりする中で、私たちの間の文化的差異は消えてなくなり、異文化の気持ちのつながりが形成された。こうした家庭的な交流により私は、一方的ではなく交流により段階的に確立される帰属意識の重要性についてより深く理解することができた。

#### 中国の大学生への提言

今回の日本訪問での経験を通じて、私は中国の社会や企業では集団意識の育成が不十分だと感じた。例えば日本企業は従業員の長期的な成長と帰属意識を重視している一方で、中国企業は今現在の業績やパフォーマンスをより重視している。こうした違いに私は、集団意識の構築には目標や効率への重視の他、さらに個人と集団の気持ちのつながりや文化への共感が必要であることを自覚した。私たち大学生は将来のキャリアにおいて個人の目標と集団の利益を融合し、自身の努力により集団の中での帰属意識を見出すと同時に、集団に対し自身の価値を捧げる必要がある。

**大学名：中国石油大学**

**氏名：王毅竜**

#### **テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

今回の奥深さと様々な要素に満ちた日本訪問の旅では、金融のきらびやかさと歴史の奥深さを体験した他、日常生活における細部では、日本人の国民性において最も感動的な風景である、あらゆる場面で見られるマナーや他人への細やかな配慮を目の当たりにし、それは春の小雨が静かに大地を潤すかのように私たちの心を育てていた。

「和」を思想とする日本では、その国民性における謙虚や尊重というものはマナーにおいて完全に表現されている。みずほ銀行の優秀な行員との対話やソニーでのテクノロジーへの探求を問わず、日本人のお辞儀や挨拶からはいずれも春風が顔をなでるような温もりと誠実さが感じられた。彼らが話に耳を傾ける姿勢は謙虚の芸術であり、彼らの回答時の言葉遣いは礼儀の詩であった。こうした礼儀の中で私たちは尊重されることの価値を感じた他、日本人の内面に対する修練へのたゆまぬ追求を目にすることができた。

またより感動的だったのは、日本人の他人への思いやりの細やかさが絹織物の絹糸のように強くても柔軟であったことである。ホテルのスタッフの笑顔でのサービスから街で遭遇した見知らぬ人の手助けまで、彼らは常に尋常ではない感度で他人の要望を察知し、行動でその思いやりを示す。これは言葉上の礼儀である以上に心の奥底での共鳴であ

り、気付かないうちに明りを灯し前方の道を照らしてくれる優しい心である。

こうしたマナーや思いやりは日本の「和」の文化そのものであり、その国民性において最もきらびやかな部分である。日本では「和」は崇高な価値観であるのみならず、それ以上に生活における哲学であり、謙虚を鎧、尊重を剣、思いやりを翼とし共に社会の調和を実現することを人々に教えている。こうした文化の薫陶により、傾聴に長け、理解力があり、また優しい心で他人を真摯に思いやるとの日本人独自の性格が形成されている。

またこうしたマナーや思いやりは中日交流における懸け橋にもなっており、両国の人々の心をより一層近づけている。毎回の踏み込んだ対話において私たちは互いの尊重と理解をベースとした深い友情を感じ、それは帯紐のように中日両国を密接に繋ぎ、将来的な協力における確かな土台を構築している。

微視的視点から見て、日本人の国民性の魅力は絵巻のようにゆっくりと展開されるもので、それは日本人の日常生活そのものであるのみならず、それ以上に彼らが世界や他人に向き合う際の姿勢の表れである。調和や温かみそして思いやりに満ちたこの土地において、私たちはよりリアルな、感動的な日本の姿を目の当たりにした。これから先、中日両国が手を取り合い、心を1つにして共にこれまで以上に輝かしい未来を構築していくことを願っている。

**大学名：中国石油大学**

**氏 名：肖金雪**

#### **テーマ：4. 日中間の交流**

今回の日本訪問において、日中両国の交流は文化の交流や融合に表れているのみならず、互いの歴史、社会及び現代における発展理念に対する理解や尊重に根付いていることを知った。飛行機から見た日没の美しい風景から大阪のすき焼き、そして京都の老舗企業から温泉の静けさまで、これらからは両国の文化の融合と互いへの影響が感じられた。

初日の行程では日本文化の奥深さと細やかさを体感した。大阪のすき焼き店では伝統的な和風の夕食を堪能し、熱々のすき焼きは冷えた身体を温めてくれただけでなく、私自身としても日本人の食文化を直に体験することができた。私が以前中国において食べた日本料理とは異なり、ここのあらゆる料理からは日本人の食材へのこだわりと料理に関する伝統技法が感じられた。その後のホストファミリーとの交流においても、私たちは両国の食文化の違いについて語り合うなど互いに美食に対する知識と好みを紹介し合った。

また京都大学などで学術交流をする中で、私は学術界には同様に国境は存在しないと感じた。京都大学の友人らとの交流の際、私たちに共通する興味や目標というものは言葉や地域の隔たりを越えることができるということを実感できた。知識への探求であれ、また学術への追求であれ、中日両国の学者らは皆より良い未来のためにたゆまず努力している。私たちは教育理念や未来のテクノロジーについて心置きなく語り合い、互いに異なる角度から知恵を得るなど、一種の異文化思想の交流と融合を体感した。

今回の日本訪問では、日本の伝統と現代文化を直に体験したと同時に日中両国の歴史と文化についての知見をより深めることができた。食卓での交流であれ、また学術や企業といった分野での討論であれ、さらには禅の修行や温泉の体験といったものであれ、これらからは中日文化の様々な側面における深いつながりを感じる事ができた。こうした微視的な文化交流を通じて、両国の人々の理解や友情はきっと今回の旅のように、今後さらに広まりそして深まっていくと確信している。

日中両国の交流は正に今回の旅における様々な出来事のように、異なる時空や背景において行われているが、テクノロジーや教育さらには文化を問わず、相互の学習と尊重はすでにこの歴史のプロセスにおいて最も美しいものとなっている。

大学名：中国石油大学

氏名：林星翰

### テーマ：1. 国民性についての理解

今回の訪日団の活動はまるで心の洗礼のようで、日本及びその国民性について私自身としても新たな知見を得ることができた。その中で最も印象的だったのは、心温まる数々の瞬間そして日本人特有の感情の表現方法であった。ホームステイでは日本の人々の誠意と優しさを強く感じた。私がお菓子の「白い恋人」を買いに行きたいと言ったところ、ホストファミリーは苦勞を厭わず一日中私に付き添ってあちこち探し回ってくれた。この些細な願いのために昼食すらとらななかったが、最終的に北海道関連のお店で見つけることができた。こうした諦めない気持ちと心遣いに私はとても感銘を受けた。彼の行動は私個人の要望を満たすことである以上に、日本の人々のおもてなしや喜んで手助けをするといった真の姿を示している。その他、日本人が感情を表現する上で独自の方法を持っていたこともとても印象深かった。私たちが良い仕事をした又は何か称賛に値することをした際、彼らは気持ちを抑えることなくいつも「すごい」等の言葉で褒めることで彼らの評価と激励の気持ちを表していた。こうしたポジティブな感情のフィードバックに私たちは異国の地で温もりと自信を感じただけでなく、それらはより日本文化における他人の業績への尊重と評価を体現していた。こうした感情的価値が満たされることで、私は日本人の人付き合いにおける細やかさと気遣いを強く感じた。彼らは他人の優れた点を発見し褒めることに長けており、誠実な称賛によりポジティブエネルギーを伝えることで、調和した前向きな社会の雰囲気を作り出している。こうした雰囲気は1人ひとりが称賛と激励の中で絶えず成長することを可能にする他、それ以上に社会全体の調和と進歩を後押ししている。今回の日本訪問を通じて、私は日本人の国民性における独自の部分についてこれまで以上に知見を深めることができた。日本の人々のおもてなしや喜んで手助けをするとの心、そして彼らの感情表現における細やかさと気遣いといったいずれからでも、私はこの国の温かみと魅力を感じることができた。こうした素晴らしい品性に私は日本に対して新たな認識が得られた他、さらに私自身これまで以上に開放的で寛容な心で様々な文化や人々を見ていくことを教わった。今後、これらの素晴らしい経験や理解を自身の生活に取り入れ、今まで以上に前向きな姿勢で人生における様々な試練に向き合っていきたいと思う。それと同時に、中日両国の人々が引き続き交流と協力を強化し、より調和した美しい世界を共に創っていただけることを願っている。

大学名：中国石油大学

氏名：陳依揚

### テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

日本を訪れる以前に私はかつて、共に悠久の歴史と明確な文化的特徴を持つ東洋の国である中国と日本において、なぜ日本はその文化を世界的に広め、流行文化や伝統文化のいずれも西洋の国々にとっての東洋文化のシンボルとすることができているのか、という問題について考えたことがある。そうした中、今回日本を訪れた私はこの問題についておおよその自分なりの答えを得ることができた。まず流行文化に関して、確かに日本の流行文化の発展は当時の経済状況や世界情勢とも関係しているが、こうした文化的雰囲気が今日まで続いている要因としては、優秀な作品の他、それ以上に自由な雰囲気が挙げられる。日本では街を散策すると至る所でアニメのポスターを見かけ、池袋のアニメイトではアニメの関連グッズを買い求めるたくさんの親子の他、スーツを着た中年の人が自分の好きなグッズを手元に並んでいる様子も目にした。日本では、アニメは父母から好まれない趣味ではなく、主流文化の一部分となっている。人々はこうした気軽な、流行っている、あまり真面目ではないかもしれない文化に対し偏見がなく、アニメはこの土地で様々な形で隅々まで又は大きく発展するなど、アニメ文化の多様性を自然と高めている。確かにエン

ターテインメントがすべてを支配する時代において私たちには流行文化に対するある程度の手引きや制限が必要だが、十分な自由があつてこそ文化の活力を維持することができるという点についても私たちは同様に覚えておく必要がある。次に流行文化の背後にある伝統文化に関しては、中国としても大いに学ぶところがある。多くの若者の話を通じて私は、彼らがよくアニメの中で目にするとの理由で日本の特定の伝統文化に興味を持っていることを知った。世界的に見て、日本のアニメは日本文化の発信において偉大な功績がある。しかしアニメ作品自体には「こうした文化を広めたい」との目的性はなく、往々にして作者が特定の文化に思い入れがあり制作しているか或いは日常の場面に日本の風習に関する内容を盛り込んでいるにすぎない。今回の旅において私たちはまた、日本が未だに多くのお祭りや記念日等の風習の他、茶道や祭祀、花火大会といった人々に素晴らしい体験をもたらす遺産を残しており、それらはまた時代と共に進化し人々の日常生活に溶け込み、人々から愛されていることを知った。伝統文化が気軽に観られまた愛されてこそ、それらが自然と自国の流行芸術作品にも登場し、さらには世界にも広まるのである。中国としてはこの点に関し学ぶところが大いにあると言える。

大学名：北京語言大学

氏名：鄭小芳

テーマ：1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

今回の訪日活動の名称は「走近日企・感受日本」だが、今回の活動が終了して私はようやくこの名称の優れた総合性と簡潔性に気付いた。「走近日企」は私たちが日本の様々な有名企業を訪問することを介して、この経済大国における現在の企業の発展状況について知見を得ることを意味しており、「感受日本」は今回の活動が単に日本をざっと見て回って終わるというものではなく、メインの企業訪問以外にも大学訪問での交流、温泉や茶道等伝統文化の体験といったものを通じて、私たち訪日団一行が日本の経済や教育そして文化といった社会全般について可能な限り理解を深めることを意味している。そのため、今回の訪問は実際のところ様々な側面に及んでいて、私自身も毎日の訪問や学習において新たな感慨が湧いた。現在この8日間の行程を振り返り、個人的に最も感慨深いのは今回の訪日活動で改めて形成された私の日本人への認識である。

今回の活動において中華人民共和国駐日本国大使館を表敬訪問しそこで私が感想を述べた際にも言及したが、今回の日本訪問は私の日本への固定観念を打ち破るもので、私の中で今まで以上に全面的で立体的そして客観的な日本が改めて形作られた。日本語学科の3年生である私はこれまで日本の社会、文化そして経済に関する内容に触れたことがあり、さらに北京語言大学にはもとより多くの日本人留学生在籍していることから、風の便りなどを耳にする中で次第に日本への第一印象が形作られていった。私はこれまでずっと、日本人のほとんどは遠慮がちで他人との距離を取りたがり、他人との衝突を避けるために自分の心の中の本当の気持ちを押し殺していると思っていた。当時私はまた、日本人家庭では父親は威厳があり寡黙であるとのイメージがあったため、ホストファミリーと初めて対面する際にはとても緊張し、特にホストファザーの前で慌てふためき、自分が何か失礼なことを言うのではないかととてもひやひやしていた。だがそうした考えは大間違いであったとすぐにわかった。まず日本人家庭について述べると、ホームステイ体験の期間はわずか1日だったが、日本人家庭において父親は非常に子どもを愛していて、とても親しみやすく、子どもと何時間も一緒に遊んだりしていた。積極的に話題を見つけて盛り上げようとしていたホストマザーに比べれば彼らの口数自体は少ないが、それでも実際には黙々と気を配っていて、それらを言葉で表していないだけであった。ホストファミリーのご夫婦には9歳と7歳そして4歳の3人の娘さんがいた。ホストマザーが夕食の支度をしている間、ホストファザーは子どもらを連れて家の近所で「鬼ごっこ」をし、私も一緒に誘われた。私は娘さんたちと一緒に

遊び、ホストファザーは「鬼」に扮した際、4歳の娘さんに対しては毎回捕まることのないように敢えて手加減をし、速く走れる私に対しては全力で追いかけるなど、私自身日本の伝統的なゲームの楽しさを満喫することができた。ゲームを楽しむ中で私は子どもらの様子を観察していたが、こうしたゲームは実際のところ子供らにとっての日常であり、うわべを取り繕ったものではないと感じた。その後、他の団員のホストファミリーの状況についても聞いてみたが、他のホストファザーも同様であったと知り、これには思わず深い感銘を受けた。と言うのも、中国ではこのように子どもと一緒に遊ぶ、威張らない父親の姿をほとんど目にすることがない、或いは中国ではこのような父親は日本よりはるかに少ないからである。また似た事例として、京都大学や一橋大学の学生ら、そしてこの8日間でたまたま出会った日本の人々との交流において、私は彼らの心からの誠意と優しさは表面的に装うことのできないものだと感じた。この8日間で私が出会った人の数は日本人全体として見た場合はとても少ないかもしれないが、少なくとも日本人の国民性に対する私の従来の固定観念には確実に問題があったことは理解することができた。1つの国の社会や文化を自ら体験することなく、前もってそれらにレッテルを貼る行為は絶対にあってはならないことである。これ自体は簡単な道理で大多数の人が同意するものであるが、また大多数の人が犯しやすい間違いでもある。そのため、今回の活動を通じて自分自身に戒めを与えることができたことをとても嬉しく思っている。今後は日本又は他の国を問わず、或いは他人との付き合いや交流を問わず、そうした固定観念や誤解を取り払うよう常に自分を戒めたいと思う。

今回の訪日活動において私たちをサポートしてくれた中国及び日本側のすべての関係者にはとても感謝している。活動最終日、皆はきっと私と同じように名残惜しく、日本を離れたくなかったと思う。だがこれが最後の対面ではない。灰太狼（中国アニメのキャラクター）の「また必ず戻ってくる！」とのセリフをここで使う。

**大学名：北京語言大学**

**氏名：楊蘊涵**

### **テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

今回の8日間の日本訪問を通じて、私は日本人のマナーのよさと他人への「配慮」を強く感じ、それらは「礼儀正しさ」そして「おもてなし」という2つの言葉で表すことができた。礼儀については主に日常生活の様々な面に表れていて、ホームステイ期間中における神社に入る際のお辞儀や手を洗うとの伝統についての理解から食事の前の「いただきます」との挨拶、そして贈り物をする、食事をする、部屋に入る、お茶を飲むなどの際の様々な礼儀まで、私は礼儀が存在する意義そして礼儀のこの国に対する影響について強く感じるすることができた。その他、私はまた日本のサービス業における「おもてなし」の姿勢やその根底を実感することができた。日本を訪れてから最も多く耳にしたのは「ありがとうございます」そして「すみません」との言葉で、場所を問わずあらゆる店の店員が正しい敬語そして温かい笑顔で接客をされていて、私はそうした接客を受ける中で非常に大きな心の満足を得られた。ここで2つの事例を挙げたいと思う。1つめは、ある晩に私が地図を持ちながらローソンで道を尋ねた際、私はその店で何も買っておらず、またその意図もなかったにもかかわらず、店員のお兄さんは簡単な説明で終わらせることなく、制服を脱ぎ、少しの間職場を離れると仲間に伝え、とても親切に私を目的地まで連れて行ってくれた。これにはとても驚かされた。そして2つめは、ホテルニューオータニ東京において、一部の客室にルームキーによる電源システムがない理由を団員が尋ねた際、これはゲストへの配慮からくるものであり、ホテルとしては冬場や夏場においてゲストが客室に戻る前に空調が作動していることでゲストが客室に戻ってすぐに快適な室温を楽しめるようにしたい。さらにホテルでは独自に給電システムを設けており、それによりホテルの正常な運営を保証するなどゲストが停電の影響を受けないようにしているとの説明がホテルの担当者からあったことである。こうしたサービス意識は私自身これまでほとんど実感したことがなかったものであった。私はもし中国のサービス業が日本のこうした礼儀やマナーそしてサービス精神を学ぶことができれば、今まで以上に発展できるかもしれないと思った。

大学名：北京語言大学

氏名：李浩楊

- テーマ：1. 国民性についての理解  
2. 集団帰属意識の強さ  
3. マナーのよさと思いやり

終了間もない第27回「走近日企・感受日本」の活動において、北京語言大学の代表者の1人として私は日本の文化や社会を深く体験でき、大きな感銘を受けた。今回の活動において私は日本企業のプロ意識を目の当たりにした他、日本人のサービス精神、国民性そして集団意識について強く感じる事ができた。

まず日本に到着した当日、全日空の乗務員から空港のスタッフまであらゆる細かな部分からは日本人の行き届いたサービスの素晴らしさが感じられた。こうしたサービス精神は今回の行程全体にわたって感じられ、交通機関であれまた様々なサービススタッフとの交流であれ、いずれも私は強い感銘を受けた。

島津製作所や京都大学の見学では、日本企業及び学術機関のレベルの高さについて知見を得ることができた。島津製作所は技術開発において卓越した実績があるのみならず、その「科学技術で社会に貢献する」との経営理念及び環境への配慮もまた印象的であった。京都大学の学生らの誠実かつ友好的な姿勢からは、日本の教育独自の魅力を知ることができた。

また茶道や座禅などの伝統文化活動を体験した私は、日本文化における細部や儀式的な緊張感への重視を強く感じた。これらは形式上の美しさであるのみならず、それ以上に客人に対する尊重と工夫の表れである。

ホームステイでは、日本の一般家庭の優しさや誠意を感じた。また神保町の書店や秋葉原では、日本人の書籍や文化への愛そして生活における細部へのこだわりを直に体験することができた。

住友商事やみずほ銀行そしてソニー等の企業の見学においては、これらの企業の世界的な影響力や進んだ理念について知見を深めることができた。特にソニーでは日本のソフトパワーを強く感じた。これらの企業はテクノロジーやビジネスにおいて他をリードしているのみならず、それ以上に文化の発信やイノベーションにおいて非常に大きな役割を果たしている。

今回の訪日活動において私は日本人の国民性、サービス意識等について深く理解することができた。こうした経験は私の知識をより豊かにしたのみならず、視野も広げてくれた。これらの見聞や体験は今後の私の学習やキャリアプランに大きな影響をもたらすと確信している。日本人の緻密さ、誠意そしてイノベーション精神のいずれも、私たちが手本とすべき、また学ぶべきものである。

大学名：北京語言大学

氏名：金百川

- テーマ：3. マナーのよさと思いやり

古来より、中国は儒家思想の薫陶を強く受けており、人付き合いにおける礼儀やマナー及び内部と外部を区別するとの原則を重視している。しかしながら現代社会に入り、戦争や変革等様々な要素の影響を受けたことにより、中国の礼儀やマナーに対する重視の度合は次第に弱まっているが、それでも依然として基本的な礼儀をもって他人と接するとの伝統文化を守っている。

私たちが今回訪れた日本は同様に大化の改新の後に中国の儒家思想の影響を強く受けたが、中国と異なるのは、現代の日本は礼儀やマナーに対してよりこだわりを持っているという点である。今回日本を訪れる以前から私は、

日本では職場においては上下関係が重視され、外部では尊重と礼儀が重視されるという話を耳にしたことがあった。日本語に敬語や謙譲語が存在しているという点は、彼らの礼儀やマナーへの重視度合をはっきりと示していた。私はかつて日本人の友人から、たとえレストランのスタッフでも、料理を運んだりお皿を下げたりする際にお客さんに対し正しい敬語を使えなければ叱られるとの話を聞いたことがある。今回実際に日本において高級な西洋レストランから伝統的な日本料理店、お寿司のチェーン店から路上の屋台まで様々な食堂を訪れたが、それらは誠意や優雅さ、また堅苦しさなどの特徴をそれぞれ持っていたが、少なくとも言葉遣いは皆しっかりとした敬語で、とても丁寧であった。

言葉の面以外にも、日本人の礼儀やマナーは彼らが他人の気持ちにとっても配慮し、他人に迷惑をかけたり他人に不快な思いをさせたりするのを嫌がるのと点にも示されている。例えば飛行機又は電車内のアナウンスにおいては必ず、他人に迷惑をかけないようにスマホをマナーモードに設定してくださいとの注意喚起がされる。エレベーター又は電車の乗り降りの際は片側を空けて人が通れるようにする。地下鉄では、乗客が多い場合は意識的に鞆を背負うのを止めて手前側に持ってきて、さらに自分が降りやすいからとドア付近に留まることなく自発的に車両の奥に進むなどがある。私はさらに日本人の有給休暇の利用率がわずか50%ほどで、それは彼らが同僚やクライアントに迷惑をかけたくないからとの理由であることをホストファミリーから聞いた。その他にもたくさんの部分で日本のマナー文化が示されている。例えば他人が自分のために何かをしてくれた時（道を譲ったなどの時）、彼らは会釈で感謝を伝え、不注意で他人の道を塞いでしまった場合も会釈でお詫びをする。これらについては日本に来る以前から耳にしていたが、実際に日本を訪れこうしたマナーを体験するとやはりとても心地良かった。こうしたマナーについては過度のもので疲れるという人もいるが、私は他人に丁寧に接するこのような文化的習慣がとても好きで、日本で生活すればすぐにこうした礼儀と譲り合いの世界に溶け込むことができる。彼ら自身も注意深くこうしたマナーを守りそして実践しているわけではなく、皆がこうにするとの社会的雰囲気の下では、人は知らないうちにそれを真似るのである。今回私も多くの日本人に尋ねたが、外から見て不思議に感じる日本のマナー習慣は皆、無意識に守っているとのことであった。

日本のように礼儀やマナーを極める国は自然と限られ、私は日本においてこうしたルールや風習を守る、互いに礼儀をもって接するとの雰囲気を享受したが、これらは実際には人と人が互いに尊重し合う、社会文明が高度に発展しているとの基盤の上で成り立っている。国は皆それぞれ独自の特色があってよく、必ずしも日本のように極めなければならぬというわけではないが、基本的な相互尊重や比較的高い教育レベルは必要である。現在、中国はそうした方向に向かっており、上海等大都市のほとんどの場所ではすでに、人々が意識的にルールを守る、他人を優先する、他人に迷惑をかけないとの雰囲気や習慣を目にすることができる。これは中国における教育の現代化に伴う段階的成果であると言える。私はかつて、日本のように高度に文明化した社会は活力と人文的風情に欠け、停滞しているように見えるとの観点について耳にしたことがあるが、私自身の体験を基に言えば、そうした観点については賛同できない。反対に私は、日本の人々は礼儀やマナーを通じて他人との間で一種の快適な距離感と信頼感を守っており、これらはいずれも私たちが学ぶべき点であると思っている。それと同時に、私たちの地域における文明や文化もまた次第に、着実に進歩していると言える。

**大学名：北京語言大学**

**氏名：楊思思**

**テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

#### **4. 日中間の交流**

日本での8日間の旅において私たちは日本文化の真髄、特にその礼儀や人との接し方について深く探求することができた。今回の旅では中日両国の文化的差異について観察する上での貴重な視点が得られただけでなく、それ以上に日本文化の独特の魅力を体験することができた。

日本のマナー文化は生活のあらゆる部分に浸透している。日本人がゲストをもてなす際に示す礼儀や周到さは、

表向きのマナーではなく、心からの尊重と他人への配慮からくるものである。企業訪問そしてホストファミリーとの交流のいずれにおいても、私たちはこうした文化の力を感じることができた。私のホストマザーは、優しい笑顔と心のこもったおもてなしで家庭の暖かみを感じさせてくれた。彼女のおかげで私は日本の伝統的な美食の他、日本における日常生活を体験することができ、こうした親しみ深く分かりやすい交流を通じて日本文化に対しより知見を深めることができた。

日本での交流において、日本の人々はコミュニケーションの際に言葉そのもの以外の表現をより重視していることに私は気が付いた。彼らは穏やかな語気や礼儀正しい言動の他、注意深く相手の話を聞くことにより、相手方への尊重と理解を伝える。こうしたコミュニケーション方法は感情があまり現れないものではあるが、強く人の心を打つものであり、一種の無音の共鳴を形成する。対して私たちの交流方法はより直接的そして開放的であるため異文化交流において時に誤解をすることもあるが、たゆまぬ交流と学習により、私たちは次第にこのような細やかなコミュニケーションの方法を理解し認めることができる。

その他、日本の人々の公共の場でのマナーもまたとても印象的だった。サービスを提供する際の彼らの丁寧さや礼儀及び歩行者に注意喚起をする際の穏やかな声色などのいずれも、日本社会における他人への深い配慮が反映されていた。こうした文化的背景の下では、個人の行為は往々にして他人に迷惑をかけないために抑制そして自制したものとなる。このように日本社会における集団主義の傾向が体现されていた。

それと同時に、中日両国の経済、文化、教育及び観光等多くの面での交流や相互作用についても知見を得ることができた。こうした交流は両国の人々の相互理解を増進しているのみならず、双方の提携や発展における確かな基盤をもたらしている。経済の面では中日両国の交流及び協力の歴史は長く、特に1972年の中日国交正常化後、政治、経済、文化教育、テクノロジー等の面での両国の交流は増え続けている。世界的な経済大国である日本の経済の発展は自国の文化と密接な関係があり、中国は近年における急速な発展により世界における重要な経済体となっている。両国の経済分野における協力は、各自の発展を促進しているのみならず、地域経済ひいては世界経済の安定と成長にも貢献するものである。

文化交流の面では、中日両国は地理的に近く、言語的にも相通じ、歴史上の密接な交流は両国の文化交流に確かな基盤を構築している。古代日本による遣唐使の派遣から、現代における学术交流そして知識共同体の確立まで、文化面での両国の交流はますます深まっている。また日本文化の中国における普及度合は新たな次元に達しており、特に日本の流行文化は中国において広く受け入れられているなど、文化交流の活発性を示している。

教育交流は中日両国の人文交流における重要な構成要素である。学術研究、学生の相互訪問、語学学習等の分野における両国の協力は強化を続けており、例えば中国における日本研究に関しては、環境法から金融学、文学から歴史といった幅広い分野を網羅するなど、学术交流の深さと広さを反映している。こうした交流は学術の発展を後押しするのみならず、両国の若者世代の相互理解と友好の基盤を打ち立てるものでもある。

観光交流は中日文化交流における重要な手段である。社会や経済の発展及び生活レベルの向上に伴い、観光はすでに両国の人々の相互理解と相互交流における重要な方法となっている。中日両国は互いに重要な旅行目的地であり、観光業の発展は文化交流を後押ししている他、関連産業の繁栄ももたらしている。旅行を通じて両国の人々は相手方のライフスタイルや社会風習を直接体験することができるなど、相互の理解や尊重の増進につながっている。

これらの交流からは、中日両国には歴史、文化、社会等の面で違いが存在しているものの、相互の尊重、学習そして協力を通じて両国は地域ひいては世界の平和と発展を共に後押しすることができるということが分かる。今回の旅では日本の自然や美しい風景そして進んだテクノロジーについて知ることができた他、それ以上に日本の文化や風土、特にマナーや人との接し方について知見を深めることができた。中日両国の文化には違いが存在するが、相互の理解や尊重の増進により、私たちは文化の壁を越えて今まで以上に調和した関係を構築することができるとの点を今回の経験を通じて改めて認識した。今回の日本訪問の旅は、私たちの異文化交流能力の向上そして世界的視野の拡大において間違いなく貴重な経験と教えをもたらしたと言える。